

自己愛傾向によって青年を分類する試み

—— 対人関係と適応, 友人によるイメージ評定からみた特徴 ——

小 塩 真 司¹

本論文の目的は理論的に指摘される2種類の自己愛を考慮した上で, 自己愛傾向の観点から青年を分類し, 対人関係と適応の観点から各群の特徴を明らかにすることであった。研究1では511名の青年(平均年齢19.84歳)を対象に, 自己愛人格目録短縮版(NPI-S), 対人恐怖尺度, 攻撃行動, 個人志向性・社会志向性, GHQを実施した。NPI-Sの下位尺度に対して主成分分析を行い, 自己愛傾向全体の高低を意味する第1主成分と, 「注目・賞賛欲求」が優位であるか「自己主張性」が優位であるかを意味する第2主成分を得た。そして得られた2つの主成分得点の高低によって被調査者を4群に分類し, 各群の特徴を検討した。研究2では, 研究1の各被調査者のイメージを彼らの友人が評定した。384名を分析対象とし, 各群の特徴を検討した。2つの研究を通して, 自己愛傾向が全体的に高い群を, 理論的に指摘される2種類の自己愛に類似した特徴を示す2つの群に分類可能であることが示された。

キーワード: 自己愛傾向, 対人関係, 適応, 友人評定, 2種類の自己愛

問題と目的

近年, 青年期に特有な人格特徴の1つとして, 自己愛的な傾向を取り上げる機会が増えている。例えば精神医学の分野では, アパシー・シンドロームや対人恐怖症など, 青年期によく見られる精神症状に関連する人格特性の1つとして自己愛が注目されている(笠原, 1999; 北西・久保田, 1998; 西岡, 1999)。また心理学の実証的研究においても, 自己愛傾向に焦点を当てた数多くの研究が行われており, 自我同一性(Cramer, 1995; 三船・氏原, 1991; 佐方, 1988), 友人関係(長沼・落合・落合, 2000; 岡田, 1999; 小塩, 1998a, 1999), 異性関係(Campbell, 1999; 小塩, 2000a)といった, 青年期に重要とされる様々な側面との関連が検討されている。このように自己愛傾向は, 青年期の心性を理解する上で重要な概念の1つと考えられている。

また現代青年の特徴として, 自己愛的な傾向が強くなっていることも指摘されている。例えば福島(1992)や町沢(1998)は, 社会の変化に伴い周囲の仲間との交流が少なくなってきたことや, 少子化に伴い過保護に育てられる子供が増加してきたことなどが, 自己愛的な青年の増加の原因となっていると指摘している。

ところで, ここで取り上げた福島(1992)と町沢(1998)はともに自己愛的な青年に注目しているが, その青年

像にはやや違いがある。福島(1992)が注目する自己愛的な青年は, 自己中心的で他者に配慮したり他人を愛したりすることが難しいなどの特徴をもつ青年である。その一方で町沢(1998)が注目する自己愛的な青年は, 傷つきやすく人と深くかかわることを避ける青年である。このように同じ自己愛的な青年であっても, 両者が注目する青年は, 対人関係上異なる特徴を示すように思われる。

臨床場面に基づく理論的な先行研究では, 自己愛的な者を大きく2つのタイプに分類する議論がなされている。例えばBroucek(1982)は自己愛人格障害を「自己中心型(egotistical narcissist)」と「解離型(dissociative narcissist)」に分類し, 前者は誇大的で傍若無人な性格であるのに対し, 後者は引きこもりがちで恥の感覚が強い者として記述している。またRosenfeld(1987)は自己愛的な患者を厚皮(thick skinned)と薄皮(thin skinned)に分類し, 前者は自己愛的な内的対象関係によって外界を能動的に覆い, 外界現実をコントロールしようとする者であり, 後者は自己愛的な内的対象関係を保護しようと外界を避け, 引きこもる者としている。さらにGabbard(1989, 1994)は, 研究者間の自己愛人格障害の臨床像の相違を取り上げ, そのような様々なタイプの自己愛人格は「無関心型(oblivious type)」と「過敏型(hypervigilant type)」と名づけられた両極の間に位置すると述べている。この両極は対人関係上の特徴によって同定され, 前者は他者の反応に鈍感で自己中心的, 攻撃的な特徴をもつものに対し, 後者は他者の評価

¹ 名古屋大学大学院教育発達科学研究科
現所属: 中部大学人文学部 〒487-8501 春日井市松本町1200
aoshio@par.odn.ne.jp

に敏感で、内気で傷つきやすい特徴をもつとされている。そして、Gabbard (1994) が自らの類型と Broucek (1982) や Rosenfeld (1987) の類型との類似性を認めているように、これらの分類には共通点がある。まず「自己中心型 (Broucek, 1982)」「厚皮の自己愛 (Rosenfeld, 1987)」「無関心型 (Gabbard, 1989)」はいずれも誇大的で攻撃的、自己中心的で他者の反応にあまり関心を示さないなどの特徴をもつ群である。その一方で「解離型 (Broucek, 1982)」「薄皮の自己愛 (Rosenfeld, 1987)」「過敏型 (Gabbard, 1989)」はいずれも抑制的で引きこもりがち、他者からの評価や反応に敏感であるなどの特徴をもつ群である。このように理論的な先行研究では、対人関係のあり方によって2種類の自己愛が特徴づけられている。

この2種類の自己愛という考え方は、先の福島(1992)と町沢(1998)の自己愛的な青年像の違いに相当すると思われる。なお青年期は自己愛の高まる時期であると言われているが(中島, 1998), 青年期の自己愛的な特性は必ずしも自己愛人格障害に移行することを意味しない (APA, 1994)。本研究では、病理的な自己愛と一般の青年がもつ自己愛との間には連続性があるという立場をとる。そして理論的・臨床的に指摘される自己愛の類型を考慮に入れ、自己愛の観点から一般の青年を分類することを試みる。

これまでに、2種類の自己愛を調査的な手法によって直接的に測定しようと試みたいくつかの研究がある。例えば Wink (1991) は、MMPI に基づく複数の自己愛尺度に対して因子分析を行い、「傷つきやすさ一敏感さ (Vulnerability-Sensitivity)」「誇大感一顕示性 (Grandiosity-Exhibitionism)」という2つの因子を見いだしている。また高橋 (1998) は、2種類の自己愛に対応する2つの下位尺度をもつ自己愛尺度の作成を試みている。これらの研究では2種類の自己愛を互いに独立した2つの特性として捉えようとしている。しかし Gabbard (1994) が述べるように、理論的・臨床的に導き出された2種類の自己愛は、各々が独立した特性というよりも2つの極として捉えられるべきだと考えられる。

その一方で、青年の自己愛研究に現在最もよく用いられている自己愛人格目録 (Narcissistic Personality Inventory; NPI) およびその短縮版 (NPI-S) を用いた研究の中にも、先の2種類の自己愛を示唆する結果がいくつか示されている。例えば岡田(1999)は、“他者からの評価に依存し、それによって自分自身の安定を得ようとする傾向”を表す「他者評価過敏尺度」が、NPI の下位尺度のうち「注目・賞賛欲求」と正の、「自己主張

性」と負の相関関係にあることを示している。また小塩 (1998a, 2000a) は、同様の関連が同性の友人関係だけではなく異性に対する態度においても見られることを報告している。さらに小塩(2000b)は、自己愛傾向の高い者を対象とした面接調査を行う中で、他者からの評価を気にし、他者に良く思われることを重視しながら対人関係を営む者は「注目・賞賛欲求」が高い傾向にあり、他者の評価にとらわれることなく対人関係を積極的に営む者は「自己主張性」が高い傾向にあることを示唆している。これらの先行研究では、自己愛傾向の下位側面のうち「注目・賞賛欲求」が他者の評価を気にする自己防衛的な対人関係のあり方に関連し、「自己主張性」が他者の評価を気にしない対人関係のあり方に関連することが示されている。このことは自己愛傾向の下位側面に焦点を当てることによって、先に述べた2種類の自己愛を考慮に入れた分類が可能であることを示唆している。

以上の問題意識に基づき、本研究では既存の尺度を用いて自己愛傾向の観点から青年を分類する指標を作成する。そしてその指標を用いて青年を分類し、各群の特徴を明らかにすることを目的とする。

研究 1

理論的に指摘された2種類の自己愛は、第1に自己愛的な者をさらに2つの種類に分類すること、第2にそれらは各々が対極に位置するような特徴を有すること (Gabbard, 1994) が仮定されている。3つの下位尺度で構成される既存の尺度からそのような仮定を含む分類を行うには、次元の縮約が必要と考えられる。そこで3つの下位尺度を主成分分析によってさらに要約し、得られた主成分得点によって被調査者を分類する。そして各類型の特徴を以下の2つの観点から明らかにする。

まず第1に、他者とのかかわり方の観点である。他者の反応に敏感で対人退却的であるか、他者の反応に鈍感で攻撃的であるかは、理論的に仮定される2種類の自己愛を分類する視点の1つである。そこで対人恐怖的心性および攻撃性から、各類型の特徴を検討する。また第2に、適応の観点である。本研究では病理的な自己愛と一般の青年がもつ自己愛との間には連続性があると仮定し、一般の青年を対象とした調査を行う。従って、自己愛傾向による類型のうち、どの群がより適応的であり、どの群がより不適応的であるかを明らかにすることは、一般青年のもつ自己愛と病理的な自己愛を考慮する上で重要な意味をもつと考えられる。

以上より研究1の目的は、既存の自己愛傾向を測定

する尺度を用いて青年を分類する指標を作成し、対人関係と適応の観点から各群の特徴を明らかにすることである。

方法

調査対象・調査時期

愛知県内の大学生511名(男性253名,女性258名)を対象に,講義時間を利用して一斉に調査を行った。調査時期は2001年4月,平均年齢は19.84(SD 0.86)歳であった。なお,研究2における被調査者の照合のために,学籍番号の記入を求めた。

調査内容

NPI-S 自己愛傾向を測定する尺度として,小塩(1998b,1999)によって作成されたNPI-Sを用いた。小塩(1997,1998a)はNPIを因子分析することにより,“自分が才能に恵まれており,他者よりも優れており有能である”などの強い自己肯定感を表す「優越感・有能感」,“自分が他者に注目されたり賞賛されることを期待する”という欲求を表す「注目・賞賛欲求」,“自分の意見をはっきりと言ひ,自ら決断する,また,やや自己中心的”な意味をもつ「自己主張性」の3因子を抽出している。NPI-Sはこの3因子に対応する30項目(各下位尺度10項目)からなり,繰り返し3因子構造が確認されている(小塩,1998b,1999)。「全く当てはまらない(1点)」「どちらかという当てはまらない(2点)」「どちらともいえない(3点)」「どちらかという当てはまる(4点)」「とてもよく当てはまる(5点)」の5件法で測定した。

対人恐怖尺度 内田(1995)が項目を選定した対人恐怖尺度(21項目)を用いた。具体的な行動上の問題を意味する「行動」因子(項目例:人が大勢いるとうまく会話の中に入っていけない)と,観念的な悩みを意味する「観念」因子(項目例:他人が自分をどのように思っているのかとても不安になる)から構成される。「全然当てはまらない(0点)」から「非常に当てはまる(6点)」までの7件法で測定した。

攻撃行動 敵意的攻撃インベントリー(秦,1990)の下位尺度のうち,具体的な攻撃の行動を意味する「身体的暴力」(私は,思わず暴力を振るってしまうことが時々ある,など10項目),「言語的攻撃」(私は,口げんかをよくする,など8項目),「間接的攻撃」(私は,知ったかぶりをする人には,わざと色々なことを聞いて困らせる,など10項目)を選択して用いた。「ちがう(1点)」から「そうだ(5点)」までの5件法で測定した。

個人志向性・社会志向性PN尺度 適応の指標の1つとして,伊藤(1993a,1995)によって作成された,個

人志向性・社会志向性PN尺度を用いた。伊藤(1993a)は,自立や個別化に向かいつつ個性を尊重し主体的に行動する特性を示す個人志向性P尺度(自分の心に正直に生きている,など8項目)と,他者や社会との関係性に意識が向かい他者との共存や社会適応を志向する傾向を示す社会志向性P尺度(周りとの調和を重んじている,など9項目)を作成している。この2つの尺度は,発達段階のみならず適応の指標としても有効とされている。また伊藤(1995)は,個人志向性と社会志向性の否定的な側面として,他者存在を考慮しない利己性や共感の欠如などを捉える個人志向性N尺度(自分中心に考えることが多い,など6項目),対人行動面でも情緒面でも不適応で,社会的にも自らを低く評価する傾向を捉える社会志向性N尺度(相手の顔色をうかがうことが多い,など7項目)を開発し,信頼性と妥当性を示している。「当てはまらない(1点)」から「当てはまる(5点)」までの5件法で測定した。

精神健康調査票(General Health Questionnaire; GHQ) 心理面のみならず身体面も含む適応の指標として,中川・大坊(1985)によるGHQの短縮版28項目を使用した。得点化は,不健康な回答であるほど得点が高くなるように0点から3点を与えるLikert法で行った。

結果と考察

各尺度の検討 複数因子から構成され,本研究でその下位側面を用いるNPI-S,対人恐怖尺度,攻撃行動,個人・社会志向性P,個人・社会志向性Nについて逆転項目の処理を行い,各因子に対応する仮説的因子パターン(1,0)をターゲットとして,主因子法・斜交Procrustes回転による確認的因子分析を行った。その結果,いずれの尺度もProcrustes回転後の因子パターンは仮説的因子パターンとほぼ一致していた。Procrustes回転後の因子パターンと仮説的因子パターンの当該因子間の一致係数(Harman,1976)を算出したところ,NPI-Sで.93-.97,対人恐怖尺度で.93と.94,攻撃行動で.92-.95,個人・社会志向性Pで.94と.95,個人・社会志向性Nで.91と.94と十分な値が得られた。また,各尺度の内的整合性を検討するために α 係数を算出した。NPI-Sの各下位尺度の α 係数はTABLE 2に,その他の尺度の α 係数はTABLE 1に示されている。各尺度の α 係数は.70(個人志向性N) -.93(対人恐怖尺度行動因子)とほぼ満足な値を示した。以上より,各尺度ともオリジナルの尺度構成のまま分析を進めることとした。各尺度に対応する項目平均値を算出し,各尺度得点とした。

なお男女差の検討を行ったところ,NPI-Sの「優越

感・有能感」(男性平均 2.74, SD .59; 女性平均 2.61, SD .54; $t(509)=2.60, p<.01$), 身体的暴力 (男性平均 2.24, SD .83; 女性平均 1.87, SD .66; $t(482.4)=5.51; p<.001$), 間接的攻撃 (男性平均 2.78, SD .64; 女性平均 2.44, SD .68; $t(509)=5.95, p<.001$) で男女差が見られ, いずれも男性の得点が高かった。

NPI-S と各尺度との関連 NPI-S と各尺度との間の関連を検討するために, 相関係数を算出した (TABLE 1)。「優越感・有能感」は個人志向性 P や社会志向性 P といった肯定的な意味あいをもつ尺度と中程度の有意な正の相関関係, 対人恐怖尺度や社会志向性 N といった否定的な意味あいをもつ尺度と中程度の有意な負の相関関係にあった。しかし同時に, 言語的攻撃といった, 必ずしも肯定的な意味あいをもつとは考えにくい尺度とも, 低い値ではあるが有意な正の相関関係にあった。「注目・賞賛欲求」は社会志向性 P と中程度の正の相関関係, 低い値ではあるが社会志向性 N とも有意な正の相関関係にあり, 個人志向性 P・N とは無相関であることから, 自己への志向性よりも他者や社会への志向性に関連すると考えられる。また低い値ではあるが, 対人恐怖尺度の観念因子・言語的攻撃・間接的攻撃といった, やや否定的な意味あいをもつと考えられる尺度と有意な正の相関を示した。「自己主張性」は「優越感・有能感」とほぼ同様の他尺度との関連のし方であったが, 特に個人志向性 P・N と高い正の相関, 社会志向性 N と高い負の相関を示したことから, 他者や社会よりも自己への志向性に関連すると考えられる。また「自己主張性」は言語的攻撃と比較的高い正の相関を示し, 身体的暴力とも正の相関を示す傾向にあることから, 直接的な攻撃行動にも関連すると考

TABLE 1 NPI-S と各尺度との相関, 各尺度の平均, SD , 得点可能範囲, α 係数 (N=511)

	自己愛傾向			平均	SD	得点 範囲	α 係数
	優越感・有能感	注目・賞賛欲求	自己主張性				
対人恐怖尺度							
行動因子	-.36***	-.06	-.44***	2.75	1.20	0-6	.93
観念因子	-.28***	.18***	-.34***	3.04	1.17	0-6	.90
敵意的攻撃インベントリー							
身体的暴力	-.01	.08	.12**	2.05	.77	1-5	.80
言語的攻撃	.26***	.19***	.57***	2.62	.78	1-5	.77
間接的攻撃	.08	.23***	.02	2.61	.68	1-5	.78
個人志向性・社会志向性							
個人志向性 P	.45***	.09	.61***	3.09	.67	1-5	.74
社会志向性 P	.32***	.38***	.15***	2.91	.67	1-5	.71
個人志向性 N	.13**	.04	.51***	3.68	.51	1-5	.70
社会志向性 N	-.37***	.15***	-.51***	3.41	.65	1-5	.73
GHQ	-.19***	.14***	-.09	.97	.42	0-3	.88

** $p<.01$ *** $p<.001$

えられる。

NPI-S 各下位尺度の主成分分析と群の設定 NPI-S の 3 つの下位尺度をさらに要約するために, 主成分分析を行った。分析の際には相関係数が用いられた。累積寄与率が 80% を越えたことから 2 成分を採用した。主成分分析によって得られた各主成分の重みと累積寄与率は TABLE 2 に示されている。第 1 主成分は「優越感・有能感」「自己主張性」に対して .65 と .61, 「注目・賞賛欲求」に対して .45 の重みを示した。「注目・賞賛欲求」に対する重みがやや小さいが, 第 1 主成分は NPI-S によって測定された自己愛傾向の総合指標としての意味あいをもつと考えられる (以下「自己愛総合」)。第 2 主成分は「注目・賞賛欲求」に重みが大きく, 数値はやや小さめだが「自己主張性」に反対方向の重みを示した。従って, 第 2 主成分は「注目・賞賛欲求」が優位であるか, 「自己主張性」が優位であるかを表すと考えられる (以下「注目-主張」)。ここで見いだされた第 1・第 2 主成分の主成分得点を各被調査者ごとに算出し, 各主成分得点の高低によって被調査者を 4 つの群に分類した。FIGURE 1 に設定された 4 群と各群の人数を示す。

自己愛傾向による 4 群と他尺度との関連 各群の特徴を明らかにするために, 2 つの主成分得点の高低と

TABLE 2 NPI-S の各得点間の相関, 主成分分析結果 (重みと累積寄与率), 平均, SD および α 係数 (N=511)

	相関係数			重み		平均	SD	α 係数
	1	2	3	I	II			
1. 優越感・有能感	—			.65	-.19	2.68	.57	.84
2. 注目・賞賛欲求	.28***	—		.45	.88	3.37	.67	.85
3. 自己主張性	.51***	.19***	—	.61	-.43	3.03	.63	.82
累積寄与率 (%)				55.81	83.96			

*** $p<.001$

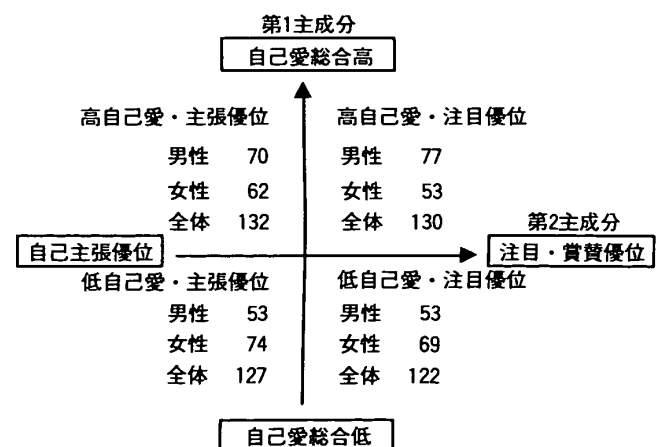


FIGURE 1 設定された 4 群と各群の人数

性別による $2 \times 2 \times 2$ の 3 要因分散分析を行った。その結果、いずれの尺度についても性別を含む交互作用は見られなかった。性別の主効果が見られたのは身体的暴力と間接的攻撃のみであった。

性別を含む交互作用が見られなかったことから、男女込みで 2 要因分散分析を行った。TABLE 3 に、群別の各得点と分散分析結果 (F 値) を示す。身体的暴力以外の全てについて、有意な効果が見られた。

対人恐怖尺度の行動因子、社会志向性 N, GHQ については有意な交互作用が見られた。そこで単純主効果の検定を行った。その結果、対人恐怖尺度の行動因子については自己愛総合低群における注目一主張の単純主効果 ($F(1,507)=8.26$)、自己愛総合高群における注目一主張の単純主効果 ($F(1,507)=57.02$) が有意であった (いずれも $p<.01$)。社会志向性 N については自己愛総合低群における注目一主張の単純主効果 ($F(1,507)=24.40$)、自己愛総合高群における注目一主張の単純主効果 ($F(1,507)=74.37$) が有意であった (いずれも $p<.01$)。GHQ については自己愛総合高群における注目一主張の単純主効果 ($F(1,507)=20.24$) が有意であった ($p<.01$)。

また対人恐怖尺度の行動因子、言語的攻撃、間接的攻撃、個人志向性 P、社会志向性 P、個人志向性 N については自己愛総合と注目一主張の主効果が有意であった。自己愛総合高群の方が低群よりも言語的攻撃、間接的攻撃、個人志向性 P、社会志向性 P、個人志向性 N が高く、対人恐怖尺度の行動因子が低いという結果が得られた。また注目優位群は主張優位群よりも対人恐怖尺度の行動因子、間接的攻撃、社会志向性 P が高く、言語的攻撃、個人志向性 P、個人志向性 N が低

いという結果が得られた。

以上の結果から、自己愛傾向が全体に高い者は低い者に比べて対人恐怖傾向を示さず、攻撃的で、個人志向的な特徴を示すといえる。また、自己愛傾向が全体的に高い者のうち、「注目・賞賛欲求」が優位な者は、相対的に対人恐怖的で間接的な攻撃を行い、社会志向的で精神的に健康を示す傾向にある。その一方で「自己主張性」が優位な者は、対人恐怖傾向を示さず言語的な攻撃を行い、個人志向的で精神的に健康な者であるといえる。自己愛傾向が全体的に高い群の中でのこのような分類は、理論的に指摘される 2 種類の自己愛に類似したものであると考えられる。

研 究 2

目的

研究 1 では自己報告式の質問紙によって自己愛傾向による各群の特徴を検討した。しかし自己愛の高い者は自己評価の正確性に欠けると指摘されるように (John & Robins, 1994)、自己愛傾向による各群の特徴を探る際には、自己報告のみならず、自己報告以外の方法も含めた検討が不可欠であると考えられる。そこで研究 2 では、自己報告以外の方法の 1 つとして、友人によるイメージの評定を用いて、各群の特徴を明らかにする。

方法

調査手続き 研究 1 の調査終了時に各被調査者に調査用紙を配布し、最も親しい同性同年輩の友人 1 名に各自のイメージを評定させるよう求めた。用紙は翌週の授業時に回収された。欠損値を除く最終的な分析対象は 384 名 (男性 179 名, 女性 205 名) であり、研究 1 の 75.2% であった。また評定者となった友人の平均年齢は 19.80 (SD 1.04) 歳であり、知り合ってから平均 36.27 (SD 42.34) カ月が経過していた。なお、被調査者の照合は学籍番号により行われた。

調査内容 井上・小林 (1985) がパーソナリティ認知の測定に有効な尺度として挙げた 49 組の形容詞対をランダムに並べて用いた。7 件法で測定した。

結果と考察

形容詞対の因子分析 友人によって評定された 49 組の形容詞対の因子構造を明らかにするために、主因子法・Varimax 回転による因子分析を行った。後続因子との固有値の差および因子の解釈可能性から 4 因子が妥当であると判断し、十分な負荷量を示さなかった 9 項目を除き、残りの 40 項目に対して再度因子分析を行った。結果を TABLE 4 に示す。

TABLE 3 4 群間の各得点と 2 要因分散分析結果 (F 値)

I: 自己愛総合	低群				高群				分散分析結果		
	主張優位		注目優位		主張優位		注目優位		主効果		
	n=127		n=122		n=132		n=130		自己愛総合	注目一主張	交互作用
	平均	SD	平均	SD	平均	SD	平均	SD	F(1,507)	F(1,507)	F(1,507)
対人恐怖尺度											
行動因子	3.08	1.20	3.29	1.05	2.05	1.07	2.64	1.09	73.54***	16.64***	3.50n.s.
観念因子	3.11	1.12	3.50	.99	2.29	1.07	3.31	1.12	28.16***	54.34***	10.94**
敵意的攻撃インベントリー											
身体的暴力	2.08	.77	1.95	.71	2.09	.82	2.09	.78	1.09n.s.	.90n.s.	.85n.s.
言語的攻撃	2.40	.66	2.21	.62	3.05	.76	2.77	.78	91.02***	14.03***	.45n.s.
間接的攻撃	2.50	.73	2.57	.62	2.56	.64	2.80	.70	5.85*	6.62*	1.85n.s.
個人・社会志向性											
個人志向性 P	2.96	.58	2.59	.55	3.54	.55	3.23	.59	149.36***	45.24***	.38n.s.
社会志向性 P	3.40	.51	3.66	.50	3.76	.44	3.89	.47	47.58***	22.25***	2.28n.s.
個人志向性 N	2.88	.57	2.59	.60	3.18	.64	2.97	.73	36.44***	19.18***	.39n.s.
社会志向性 N	3.44	.53	3.78	.53	2.92	.64	3.53	.56	59.68***	91.98***	6.79**
GHQ	.99	.43	1.03	.41	.82	.36	1.05	.43	3.76n.s.	14.09***	6.80**

* $p<.05$ ** $p<.01$ *** $p<.001$

TABLE 4 友人評定の因子分析結果 (Varimax 回転後の因子パターン; N=384)

項目内容	I	II	III	IV	共通性
無口な	.79	.11	-.08	-.07	.65
さびしい	.77	.19	-.09	.03	.64
暗い	.74	.29	-.09	.08	.65
静的な	.72	.04	-.14	.20	.58
静かな	.71	-.06	-.26	-.11	.59
非社交的な	.69	.28	-.01	.08	.56
内向的な	.69	.16	.02	.19	.53
疲れた	.65	.35	.06	.06	.55
不活発な	.64	.20	.01	.29	.54
陰気な	.64	.29	-.02	.09	.51
消極的な	.63	.03	.06	.36	.53
空虚な	.48	.27	.24	.21	.40
地味な	.47	-.09	.01	.16	.25
不自由な	.43	.23	-.20	.25	.35
厳しい	.04	.75	.08	.00	.58
冷たい	.22	.75	.15	-.05	.63
感じの悪い	.26	.74	.12	.06	.63
不親切な	-.02	.68	.35	.12	.59
わがままな	.06	.66	.24	.14	.52
悪い	.14	.65	.16	.13	.48
親しみにくい	.36	.65	.01	-.03	.55
嫌いな	.28	.59	.11	.19	.48
かたい	.19	.58	-.16	-.01	.40
四角い	.01	.56	-.07	-.11	.33
にくらしい	.12	.55	.26	-.10	.39
強情な	.18	.53	.18	.02	.35
頼りない	.18	.51	.22	.16	.36
こせこせした	-.29	.50	-.20	-.18	.41
だらしない	.06	.14	.79	.12	.66
無責任な	.06	.30	.69	.24	.63
ふまじめな	-.17	.09	.64	-.04	.45
軽率な	-.22	.13	.56	.12	.40
不潔な	.17	.34	.55	.11	.45
感情的な	-.14	.07	.50	-.01	.27
単純な	-.12	-.20	.39	.32	.31
弱い	.18	.06	.03	.82	.71
弱々しい	.27	.10	.04	.74	.64
頼りない	.20	.18	.38	.69	.69
鈍い	.06	-.11	.24	.66	.51
弱気な	.32	-.02	-.02	.63	.50
自乗和	6.96	6.48	3.43	3.38	20.24
寄与率(%)	17.39	16.19	8.58	8.45	50.60

第1因子に高い負荷量を示した項目は、無口な—おしゃべりな、さびしい—にぎやかな、などの14項目であり、この因子は外向性と名づけられた。第2因子に高い負荷量を示した項目は、厳しい—優しい、冷たい—暖かいなどの14項目であり、この因子は調和性と名づけられた。第3因子に高い負荷量を示した項目は、だらしない—きちんとした、無責任な—責任感のあるなどの7項目であり、この因子は誠実性と名づけられた。第4因子に高い負荷量を示した項目は、弱い—強い、弱々しい—たくましいなどの5項目であり、この因子は強さと名づけられた。

各因子に高い負荷量を示した項目の平均値を算出し、

各下位尺度得点とした。内的整合性を検討するために α 係数を算出したところ、各下位尺度の α 係数は .77-.91 と十分な値を示した (TABLE 5)。また性差の検討を行ったところ、外向性 (男性平均 4.93, SD .96; 女性平均 5.17, SD .87; $t(382)=2.52, p<.05$)、調和性 (男性平均 5.04, SD .78; 女性平均 5.61, SD .75; $t(382)=7.31, p<.001$)、誠実性 (男性平均 4.58, SD .98; 女性平均 5.03, SD .89; $t(382)=4.80, p<.001$) で、男性よりも女性の方が得点が高かった。

NPI-S 下位尺度と友人評定の関連 NPI-S と各得点との間の相関係数を算出した (TABLE 5)。「優越感・有能感」は低い値ではあるが強さと有意な正の相関関係にあった。「注目・賞賛欲求」は外向性と有意な正の相関関係にあった。「自己主張性」は外向性・強さと中程度の相関を示した。誠実性と調和性については、NPI-S のいずれの得点とも有意な相関を示さなかった。

自己愛傾向による4群と友人評定との関連 研究1で見いだされた4群の特徴を明らかにするために、2つの主成分得点の高低と性別による $2 \times 2 \times 2$ の3要因分散分析を行った。その結果、いずれの尺度についても性別を含む交互作用は見られなかった。性別の主効果が見られたのは外向性、調和性、誠実性であった。

性別を含む交互作用が見られなかったことから、男女込みで2要因分散分析を行った。TABLE 6に、群別の各得点と分散分析結果 (F値) を示す。外向性と強さについては自己愛総合の主効果が有意であり、いずれも自己愛総合高群の方が低群よりも得点が高かった。

TABLE 5 NPI-S と友人評定との相関, 平均, SD , 得点可能範囲, α 係数 (N=384)

	自己愛傾向			平均	SD	得点範囲	α 係数
	優越感・有能感	注目・賞賛欲求	自己主張性				
外向性	.12*	.21***	.35***	5.06	.92	1-7	.91
調和性	.02	.06	-.06	5.35	.81	1-7	.89
誠実性	.05	-.01	-.06	4.82	.96	1-7	.77
強さ	.18***	.09	.31***	4.73	1.13	1-7	.83

* $p<.05$ *** $p<.001$

TABLE 6 4群間の各友人評定得点と2要因分散分析結果 (F値)

I: 自己愛総合	低群		高群		分散分析結果		
	主張優位	注目優位	主張優位	注目優位	主効果		
II: 注目-主張	n=93		n=96		n=101		n=94
	平均	SD	平均	SD	平均	SD	平均
外向性	4.83	.82	4.84	.89	5.27	.90	5.27
調和性	5.28	.83	5.46	.78	5.24	.84	5.41
誠実性	4.84	.97	4.89	.87	4.73	1.02	4.85
強さ	4.67	.99	4.30	1.18	5.02	1.07	4.89
					1.15	17.44***	5.06*
							1.11n.s.

* $p<.05$ *** $p<.001$

また調和性と強さについては注目一主張の主効果が有意であり、注目優位群は主張優位群よりも調和性が高く強さが低いという結果が得られた。

以上の結果から、自己愛傾向が全体的に高い者ほど外向的で強い人間だと友人に認識され、「自己主張性」に比べ「注目・賞賛欲求」が優位な者ほど調和的で弱い人間だと友人に認識される傾向にあることが明らかにされた。これらの結果は、研究1で見いだされた自己報告による各群の特徴が、友人にもある程度認識されていることを示していると考えられる。

総合的考察

自己愛傾向の3つの下位側面

NPI-Sによって測定される3つの下位側面のうち、「優越感・有能感」は他者よりも優れており有能であるなどの強い自己肯定感を意味し、「自己主張性」は自分の意見を述べるなど能動的で積極的な自己愛傾向の側面（小塩, 1998a）を意味する。また先行研究では、この2側面はともに自尊感情と正の相関関係にあり（小塩, 1997, 1998a）、自己の肯定的な感情に関連していた。研究1における他尺度との関連からも、両側面はともに個人志向性Pや社会志向性Pなど適応的な意味あいをもつ尺度と正の相関、対人恐怖尺度や社会志向性Nなど不適応的な意味あいをもつ尺度と負の相関を示す傾向にあった。従って、この2側面は自己愛の比較的適応的な側面を測定していると考えられる。

しかし「優越感・有能感」と「自己主張性」を比較すると、後者は他者存在を考慮しない利己性や共感の欠如などを捉える個人志向性N尺度や、言語的攻撃と高い正の相関関係にあるなど、より自己中心的で攻撃的な特徴もあわせもつ点に特徴がある。さらに研究2では、「自己主張性」は友人から外向的で強い人間だと認識される傾向に関連することが示された。このことは、「自己主張性」が有する能動的で積極的な特徴や攻撃的な特徴を、友人も認識していることを表す。つまり、「自己主張性」がもつそのような特徴は、実際の対人場面においても現れるものといえるだろう。

また、自己愛傾向の下位側面のうち「注目・賞賛欲求」は他者に注目され賞賛されたいといった、他者からの肯定的評価を強く期待する内容で構成されている。また先行研究では、この側面は「優越感・有能感」「自己主張性」と正の相関関係にあるが、自尊感情とは無相関であることが示されている（小塩, 1997, 1998a）。研究1における他尺度との関連からも、対人恐怖傾向や言語的・間接的攻撃などのやや否定的な意味あいをもつ

と考えられる尺度と、低い値ではあるが正の有意な相関を示すことが明らかにされた。従って、「注目・賞賛欲求」は他の2側面に比べ、やや不適応的な意味合いが強いと考えられる。

研究2では、「注目・賞賛欲求」は友人評定による外向性と正の相関を示した。このことは対人恐怖傾向と正の関連を示すという結果に矛盾するように思われる。しかし「注目・賞賛欲求」が関連するのは対人恐怖尺度のうち、より内的な対人関係上の悩みを表す観念因子のみであり、社会志向性Pとも正の関連をしていた。他者から注目されたり賞賛されたいという自己愛的な欲求は、対外的には外向的な振る舞いに結びつくが、内的にはその対人関係に不安や悩みを覚えることに関連するのではないかと考えられる。ただし、「注目・賞賛欲求」と観念因子や外向性との相関係数は有意ではあるがそれほど高い値ではなかった。このような「注目・賞賛欲求」の特徴については、さらなる検討が必要であろう。

自己愛傾向による分類とその特徴

本研究ではNPI-Sの3つの下位尺度に対して主成分分析を行い、自己愛傾向の総合指標としての意味あいをもつ自己愛総合と、「注目・賞賛欲求」が優位であるか「自己主張性」が優位であるかを表す注目一主張という2つの主成分を得た。そして研究1と研究2の結果から、自己愛総合高群は低群よりも対人恐怖傾向が低く、攻撃的で個人志向的であり、外向的で強い人間だと友人に認識されることが示された。自己愛傾向が全体として高い者は自己に対する誇大感や他者に対する優越感をもつため、他者に対する積極的・攻撃的な態度を示しやすいと考えられる。

また注目一主張に関しては、「注目・賞賛欲求」が優位な者は「自己主張性」が優位な者よりも、対人恐怖的で間接的な攻撃を行い、社会志向的で精神的な不健康を示す傾向にあることや、友人から調和的で弱い人間だと認識される傾向にあることが示された。「注目・賞賛欲求」が優位な者は、「自己主張性」が意味する自己主張的行動が少なく、他者からの注目や賞賛を強く期待するなど、受け身的な態度をもつと考えられる。従ってこのような者は他者からの評価を気にするため、社会志向的で調和的な振る舞いをし、他者を攻撃する際にも直接的な攻撃を避け、間接的な攻撃をする傾向にあると考えられる。その一方で「自己主張性」が優位な者は、他者からの賞賛を期待せず、能動的・積極的に他者に対して自分の意見を主張する傾向にあると考えられる。従ってこのような者は他者からの評価を気

にせず、個人志向的で言語的な攻撃を行い、調和性に欠けるなど、やや自己中心的な傾向を示すと考えられる。

理論的に指摘される2種類の自己愛は、第1に自己愛的な者をさらに2種類に分類すること、第2にそれらは各々が対極に位置するような特徴を有することが仮定されている。本研究の結果は自己愛総合と注目—主張という2つの指標を用いることによって、自己愛傾向が全体に高い者を、さらに2つの群に分類することが可能であることを示唆している。そして本研究の結果から、自己愛全体が高い者のうち「自己主張性」が優位な者が、誇大的で攻撃的な特徴をもつ「無関心型 (Gabbard, 1989)」の自己愛に相当し、「注目・賞賛欲求」が優位な者が、抑制的で引きこもりがちな特徴をもつ「過敏型 (Gabbard, 1989)」の自己愛に相当すると考えられる。また「自己主張性」が優位な者は福島 (1992) の自己愛的な青年像に、「注目・賞賛欲求」が優位な者は町沢 (1998) の自己愛的な青年像に類似した特徴をもつ。先行研究 (高橋, 1998 ; Wink, 1991) では2種類の自己愛を互いに独立した2つの特性として捉えているが、本研究で見いだされた自己愛総合と注目—主張という2つの指標を組み合わせることによって、より理論に沿うかたちで2種類の自己愛を捉えることが可能であると考えられる。

また理論的に指摘される2種類の自己愛は、臨床場面において自己愛的な特徴を示す患者を、さらに2種類に分類するものである。従ってそのような理論では、自己愛的な者を分類することに焦点が当てられており、自己愛的でない者の分類については言及されていない。しかし本研究で採用した手法を用いることによって、自己愛傾向が全体的に低い者も高い者と同様に分類することが可能である。そして研究1と研究2の結果から、自己愛総合が低く「自己主張性」が優位な者は、最も社会志向性Pが低い傾向にあった。このような者は自己愛傾向が全体的に低いことからやや自信に欠けている。そして、「注目・賞賛欲求」が低く「自己主張性」が高いことから、あまり他者の評価を気にせず、他者や社会との関係性に意識が向かわない状態にあると考えられる。その一方で自己愛総合が低く「注目・賞賛欲求」が優位な者は、最も対人恐怖的で友人から弱い人間だと認識される傾向にあった。このような者は自己愛傾向が全体的に低いことからやや自信に欠けており、「自己主張性」が低く「注目・賞賛欲求」が高いことから、積極性に欠け他者の評価を気にする状態にある。そのために主体性の欠如や対人恐怖的心性を

示すと考えられる。

本研究で示された4つの群を比較すると、自己愛総合が低く「注目・賞賛欲求」が優位な者の方が、自己愛総合が高く「注目・賞賛欲求」が優位な者よりも、抑制的で引きこもりがちな特徴を示している。しかし先にも述べたように、臨床場面に基づく理論的な2種類の自己愛は、自己愛的な者をさらに2つの群に分類するものであり、自己愛的ではない者の特徴は示されていない。本研究で示されたような、自己愛傾向が全体的に低い者も含む分類については、今後も検討を重ね、各群の特徴をさらに明確にしていく必要があるだろう。

また本研究で見いだされた自己愛総合と注目—主張によって分類された各群の特徴は、青年期の適応を考慮する上で重要な示唆を与えるものである。例えば個人化と社会化の発達プロセスモデル (伊藤, 1993b) を考慮すると、個人志向性Pと社会志向性Pが高い自己愛総合高群は、自己愛総合低群よりも心理的に成熟した状態にあると考えられる。しかし同時に、自己愛総合が高く「自己主張性」が優位な者は自己中心的で言語的攻撃が高く、「注目・賞賛欲求」が優位な者は間接的攻撃が高いなど、これらの群は周囲の者から嫌悪されるような特徴をあわせもっているとも考えられる。ところが研究2では、このような周囲からの否定的評価を明確に示す結果は得られなかった。これは、現在良好な関係にあると考えられる親友によるイメージ評定を用いたためであるかもしれない。また本研究では被調査者の照合のために学籍番号の記入を求めたが、そのことによって被調査者が個人の特定が可能であると感じ、否定的な評価を避けるよう周囲に働きかけたことが結果に影響を与えているのかもしれない。自己評価と他者による評価の差異は、自己中心的な傾向を伴う青年期の自己愛を考慮する上で重要な視点であると考えられるため、この点については測定方法を改善し、引き続き検討を重ねる必要があるだろう。

本研究では自己愛傾向による各群の特徴を、自己報告と友人評定を用いて、対人関係と適応の観点から検討してきた。しかし本研究の結果は、あくまでも一般青年を対象とした調査的な手法によって各類型の特徴を検討したものであるという点には留意する必要があるだろう。今後、自己愛傾向による各類型の特徴をより明確なものにするためには、各群に分類された青年に対して面接調査を行うことや、臨床場面において特定の症状を示す患者にNPI-Sを実施し、健常群と比較することなども必要とされるだろう。

引用文献

- American Psychiatric Association 1994 *Diagnostic and statistical manual of mental disorders (4th ed.)* : DSM-IV. Washington, D.C. : Author.
- Broucek, F. 1982 Shame and its relationship to early narcissistic developments. *International Journal of Psychoanalysis*, **63**, 369—378.
- Campbell, W.K. 1999 Narcissism and romantic attraction. *Journal of Personality and Social Psychology*, **77**, 1254—1270.
- Cramer, P. 1995 Identity, narcissism, and defense mechanisms in late adolescence. *Journal of Research in Personality*, **29**, 341—361.
- 福島 章 1992 青年期の心—精神医学からみた若者— 講談社
- Gabbard, G.O. 1989 Two subtypes of narcissistic personality disorder. *Bulletin of the Menninger Clinic*, **53**, 527—532.
- Gabbard, G.O. 1994 *Psychodynamic psychiatry in clinical practice : The DSM-IV edition*. Washington : American Psychiatric Press.
- Harman, H.H. 1976 *Modern factor analysis (3rd ed.)*. Chicago : University of Chicago Press.
- 秦 一士 1990 敵意的攻撃インベントリーの作成 心理学研究, **61**, 227—234.
- 井上正明・小林利宣 1985 日本におけるSD法による研究分野とその形容詞対尺度構成の概観 教育心理学研究, **33**, 253—260.
- 伊藤美奈子 1993a 個人志向性・社会志向性尺度の作成及び信頼性・妥当性の検討 心理学研究, **64**, 115—122.
- 伊藤美奈子 1993b 個人志向性・社会志向性に関する発達的研究 教育心理学研究, **41**, 293—301.
- 伊藤美奈子 1995 個人志向性・社会志向性PN尺度の作成とその検討 心理臨床学研究, **13**, 39—47.
- John, O.P., & Robins, R.W. 1994 Accuracy and bias in self-perception : Individual differences in self-enhancement and the role of narcissism. *Journal of Personality and Social Psychology*, **66**, 206—219.
- 笠原 嘉 1999 アパシー・シンドロームとパーソナリティ 精神科治療学, **14**, 739—744.
- 北西憲二・久保田幹子 1998 社会恐怖と引きこもり 最新精神医学, **3**, 227—234.
- 町沢静夫 1998 現代人の心にひそむ「自己中心性」の病理 双葉社
- 三船直子・氏原 寛 1991 青年期の自己愛人格について—実証的研究を中心にして— 大阪市立大学生活科学部紀要, **39**, 199—213.
- 長沼恭子・落合幸子・落合良行 2000 自己愛傾向からみた友人関係における“山アラシ・ジレンマ”への「心理的対処反応」の特徴 筑波大学心理学研究, **22**, 183—190.
- 中川泰彬・大坊郁夫 1985 日本版 GHQ 精神健康調査票手引 日本文化科学社
- 西岡和郎 1999 対人恐怖症とパーソナリティ 精神科治療学, **14**, 753—759.
- 岡田 努 1999 現代青年に特有な友人関係の取り方と自己愛傾向の関連について 立教大学教職研究, **9**, 21—31.
- 小塩真司 1997 自己愛傾向に関する基礎的研究—自尊感情, 社会的望ましさと関連— 名古屋大学教育学部紀要(心理学), **44**, 155—163.
- 小塩真司 1998a 青年の自己愛傾向と自尊感情, 友人関係のあり方との関連 教育心理学研究, **46**, 280—290.
- 小塩真司 1998b 自己愛傾向に関する一研究—性役割観との関連— 名古屋大学教育学部紀要(心理学), **45**, 45—53.
- 小塩真司 1999 高校生における自己愛傾向と友人関係のあり方との関連 性格心理学研究, **8**, 1—11.
- 小塩真司 2000a 青年の自己愛傾向と異性関係—異性に対する態度, 恋愛関係, 恋愛経験に着目して— 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要(心理発達科学), **47**, 103—116.
- 小塩真司 2000b 自己愛的な青年の面接調査—対人関係に着目して— 日本心理学会第64回大会発表論文集, 970.
- Rosenfeld, H. 1987 *Impasse and interpretation : Therapeutic and anti-therapeutic factors in the psychoanalytic treatment of psychotic, borderline, and neurotic patients*. London : Tavistock Publications.
- 佐方哲彦 1988 同一性拡散の心理的特徴の一側面—自己愛傾向および共感性との関連— 日本心理学会第52回大会発表論文集, 108.
- 高橋智子 1998 青年のナルシズムに関する研究—ナルシズムの2つの側面を測定する尺度の作成— 日本教育心理学会第40回総会発表論文集,

147.

内田裕之 1995 大学生の世間意識と対人恐怖的心性
との関連 心理臨床学研究, 13, 75—84.

Wink, P. 1991 Two faces of narcissism. *Journal
of Personality and Social Psychology*, 61, 590—
597.

謝 辞

分析にあたり、名古屋大学教育発達科学研究科、村
上 隆教授には貴重なご意見をいただきました。心よ
り御礼申し上げます。

(2001.5.17 受稿, '02.2.27 受理)

Narcissism, Interpersonal Relationships, and Adaptation : Two Types of Narcissism in Young Adults

ATSUSHI OSHIO (GRADUATE SCHOOL OF EDUCATION AND HUMAN DEVELOPMENT, NAGOYA UNIVERSITY) JAPANESE JOURNAL OF EDUCATIONAL PSYCHOLOGY, 2002, 50, 261—270

The purpose of the present paper is to classify adolescents and young adults from the viewpoint of narcissism, and to identify characteristics of their interpersonal styles and adaptation. In Study 1, 511 adolescents and young adults (mean age 19.8 years) completed the Social Phobic Tendency Scale, the Aggressive Behavior Scale, the Individual and Social PN Orientation Scales, the Narcissistic Personality Inventory-Short Version (NPI-S), and a General Health Questionnaire. In Study 2, 384 of the participants in Study 1 were described by their friends. A principal component analysis of subscales of the Narcissistic Personality Inventory-Short Version resulted in 2 principal components : one implying entire narcissism, and the other, a dominant level on the “need for attention and praise” subscale of the Inventory. The participants were then divided into 4 groups according to their scores on the 2 principal components. The results indicated that adolescents and young adults who score high on narcissism could be divided into 2 groups that have similar characteristics to the 2 types of narcissism dealt with in psychoanalytic studies.

Key Words : narcissism, interpersonal relationships, adaptation, descriptions by friends, young adults